

## 生活の中の障害

### —軽度で非顕在的でかつ波と幅と時間的推移と 場面性のある障害としての吃音と「工夫」の社会学—

山田 実沙子

樫田 美雄※

※はコレスポন্ディング・オーサー

神戸市看護大学看護学部

Kashida.yoshio@nifty.ne.jp

#### Disability in daily life:

#### Categorization of handling methods for stuttering problems

**YAMADA Misako**

**KASHIDA Yoshio**

Kobe City College of Nursing

*Key words: Disability, Stuttering, Handling methods, Daily life*

#### 1. はじめに—“生活の中の障害”としての吃音

「吃音」はコミュニケーションにかかわる社会的な障害である。本論文では、この「吃音」を“生活の中の障害”として扱う。具体的には、「吃音」を、それへの対処行動（以下「工夫」と呼ぶ）とワンセットのものとして、周囲との相互行為のなかで総合的に意味付けられるものとして扱う。したがって、吃音の特徴把握においても、社会的な意味理解においても、従来の吃音研究とは異なる“社会学的視点”が採用されることになるだろう。

#### 1-1. 軽度で非顕在的な問題という側面

吃音は一般的に「言葉が円滑に発話できない疾病または障害」とされており、一部の器質性の吃音を除けば、原因、治療法ともに不明である。流暢に発話ができないからといって、発話そのものをする事ができない、言葉を話す事ができないというわけではないし、文書を視認に基づいて読み書きする能力に問題があるわけでもない。重度の場合自殺率が高いという議論はあるが、直接的には生死にかかわる障害ではなく、視認性が低いという点からは「軽度障害」の範疇にいてよさそうである。

吃音者でなくとも流暢に話せないことはあり、吃音であることは、それほど思い悩むべき問題ではないと言われてしまうこともあるが、そこが問題であるともいえる。

上述のように、吃音者であることは見た目ではわからず、発話場面を逃れ続けるならば、みつからないで済む。さらに、吃音者であっても、吃音の症状が出ないように、話したりふるまったりすることが可能な場合が多い。したがって、実際は発話したとしても吃音者であることを隠しおおせることがある。このように、吃音は「軽度で非顕在的な問題という側面」および「吃音に対する工夫を持続的に行うことを吃音者に強いる生活拘束的側面」をもっていると考えられる。つまり「吃音問題」を考える場合、こういった「生活の中の障害」的側面こそが吃音者の悩みの特徴をなしている場合があると考えられることができるだろう。

その一方で、「吃音」は問題であるだけではないようにも思われる。「吃音」と「吃音への工夫」の中に、「人生の機微」や「社会との交流のきっかけ」を見ることもできるように思われる。すなわち、上述の諸特徴や以下に述べるような吃音の別の諸特徴は、さまざまに組み合わせあって、吃音者の生きづらさや悩みや喜びや面白さや生きがいを構成しているのではないだろうか。本稿はその状況を社会的に分析し、最終的に「生活の中の障害としての吃音」の様相を明らかにしようとするものである。

## 1-2. 波, 幅, 時間的推移, 場面性, という特徴

上述したものは別の吃音の特徴として、波（があること）、幅（があること）、時間的推移（があること）、場面性（があること）、これらを挙げることができるだろう。

「波」とは、症状の出現の程度に大きいときと小さなときの両方が時間の推移にかかわって存在していることを意味する。症状が現れにくい時もあれば、強く現れる時もあり、期間は日単位、週単位、月単位など人によって異なる。この波は、自分でコントロールできないものとして存在し、回復なのか波なのかの区別を困難にする。

「幅」は、「多様性」といいかえるべきかも知れないが、まずは、個人別にみて重症度に違いがある、という意味として考えることができる。重度の吃音者もいれば軽度の吃音者もいるということだ。けれどもこの「幅」に関して重要なことは、症状が重く現れるからといって吃音に対する悩みが大きいとは限らないということである。症状が重く現れていても、吃音についてあまり悩んでいなかったり、自分のことを「重度の吃音者（障害者）」とはとらえていなかったりする人達がいる。反対に、一見症状が軽いように見えても本人は吃音について深く悩んでいたり、自分を「軽度の吃音者（障害者）」とはとらえていなかったりする人もいる。この組み合わせ状況にも「幅」がある。そもそも、吃音者であることの深みや重みが、症状の軽重と一致していない、という主張すら可能である。さらに、これらの「幅」（多様性）は個人別の広がりにかかわっていえるとともに、一個人の中でも存在するものであるともいえよう。

「時間的推移」とは、幼児や小中学生のときはかなり症状が出現していたが、大人に

なるとあまり出なくなった、といったことである。一般に幼児期で5%程度と言われる吃音者の比率は、歳を重ねるにつれて減り、成人では1%程度になるという。しかし、上述の「波」で記したように、この一般的傾向と個人の成長につれての変化がつねに一致するわけではない。

「場面性」とは、場面ごとに、吃音の現れがことなる、ということである。個人差はあるものの、吃音が出やすい場面に関する共通性はよく指摘されている。一般的には、非日常的な緊張の高まる場面で吃音が出やすいと言われるが、リラックスした場面の方で吃音が出やすいと主張する吃音者もいて、一様ではない。外国語を話す場面では出にくいという主張も多いが、外国語に習熟するにつれて、日本語の場合と差がなくなると主張する吃音者もいる。歌う場面や演劇の台詞では吃音が出にくいという主張も多いが、一様ではないことに留意すべきである。

### 1-3. 「工夫」から生活の中の障害について知る

吃音は、軽度で非顕在的な障害であるという側面を持ちつつ、波や幅、時間的推移、場面性があるという特徴をも合わせ持つ。これらの特徴をもつ吃音は、軽度で非顕在的ながらも吃音者本人を深く悩ませ、生きづらさを感じさせる障害になりうる。その一方で、生活に多くの障害をもたらしつつも、その症状の発現の機微によって、この世で当事者が生きる意味を深める側面をも持っているように見える。あるいは、吃音をめぐる様々な社会的事情と個人的対処が、社会学的に興味深い現象となっている面もあるように思われる。すなわち、吃音には、通常理解されている以上の「意義深さ」があるように思われるのである。

吃音の「意義深さ」を探究する1つの切り口として、本稿では、吃音を生物学的な障害という側面ではなく、生活の中の障害という側面からとらえて論じることとしよう。すなわち、まずは上述した吃音の諸特徴が生活の中でどうあらわれ、吃音者がそれらにどのように対処しているのか、この点に焦点を当てて論じようと思う。つまり、吃音者が生活の中で行っている「工夫」を探究するならば、それを通して吃音の深さを知ることができるのではないだろうか。我々はそのように考え、インタビューと参与観察において、吃音者の「工夫」に注目して探究を行った。

ここで「工夫」というのは、最大範囲を取っていうならば、吃音者が吃音と付き合いながら生活するなかで吃音とどのように向き合い、どのような行動をとっているかの全体である。つまり、吃音とともに生きる生き方の全体である。この「工夫」の中には、なるべく吃音が明らかにならないように話し方を工夫するといった、比較的吃音の発生機序に直接かかわった事象から、吃音が発生しやすい局面に遭遇しないようにするためにどのような工夫を行っているか、とあって、比較的吃音の発生機序から遠い事象までを含む。それらをインタビューで聞くとともに、吃音者のセルフヘルプグループの活動に参加して、参与観察をさせていただいた。

吃音者が行う工夫は、一人一人が意識的に試行錯誤しながら開発した個人的なものである、という場合もあれば、多人数が一緒に活動するなかで無意識のうちに培われた、文化的で集団的なものである、という場合もあるだろう。本来は、その両者を含めて考えるべきかもしれないが、ここでは、インタビューという調査技法との相性から、まずは、個人的なものを中心としてみて行きたい。すなわち、本来は、個人および集団が吃音をもちながら生きていくための技術の総体として「吃音者の工夫」をとらえるべきだろうが、ここでは、「個人の工夫」に焦点を当てることにしよう。もちろん、多くの吃音者に共通する工夫もあると思われるが、どのような人がどのような状況でその工夫をどのように行っているのか、という個別性にここでは注目していきたい。そのようにして、とりあえず今回の調査では、個人が日常的に行っている「工夫」を通して、吃音とともに生きている個別の吃音者のリアルな姿の一端について知ることができれば、それでよい、と考えていきたい。

## 2. 調査の概要

実際に吃音と付き合いながら生きている吃音者の姿を知るために、吃音者が集うセルフヘルプグループに参加させていただきたい。プライバシーに配慮して、ここでは、当該のセルフヘルプグループを「XX 言友会」と匿名的に表記することにする。

調査は2016年5月に開始した。インターネット上で連絡先を調べて、ある関西地区のセルフヘルプグループにコンタクトを行った。その結果、お返事がいただいたXX言友会の作業日に作業会場に訪問して、組織の幹部の方と打合せをすることになったので、それを実行した。打合せの結果、グループの定例会に参加して、インタビュー候補者を募集することとなった。結局、言友会のメンバー中から3名の方を紹介していただき、御願したところ、全員にインタビューに応じてもらえることとなった。

インタビューに協力していただいた方は3名とも20代の男性で、Aさん(学生)、Bさん(学生)、Cさん(社会人)の3名である。インタビューは、「吃音者が行う工夫について」というテーマを呈示したうえで、インタビューガイドを用いた半構造的インタビューの方法をとった。

## 3. 結果

インタビュー結果の逐語録から、「工夫」について語っている部分、「工夫」と考えられるような行動を挙げて「a～s」とし、それらをカテゴリーに分類し「ア～キ」としてまとめた。この結果を「表1」に示した。「工夫」を類別した7つのカテゴリーは、ア〈話し方のテクニック〉、イ〈話す準備における工夫〉、ウ〈工夫せず発話〉、エ〈心身の総合調整〉、オ〈相手の先取り発話容認〉、カ〈文字で伝達〉、キ〈サブカルチャー〉、のそれぞれである。

「表1」より、3名の工夫のそれぞれをみるだけでも、実に多様な工夫を行っている

ことがわかる。さらに、「表 1」からは、各工夫が全員に均等に採用されているわけではないことも分かる。さまざまな条件に基づいて「工夫」が使い分けられているようだ。

表 1：吃音者が採用する工夫の一覧

	A さん	B さん	C さん
ア〈話し方のテクニック〉	a. 「言い替え」	b. 「言い替え」	c. 「言い替え」
	d. 「間投詞の使用」	e. 「間投詞の使用」	
	f. 「単語を音に分割して話す」		
	g. 「話すタイミングをつくる」	h. 「どもったときに手を動かす」	
		i. 「発話する前に喉をつめる」	
		j. 「間をあけて発話する」	
イ〈話す準備における工夫〉	k. 「原稿を使用せずに話す」		
ウ〈工夫せず発話〉			l. 「頑張って発話する」
エ〈心身の総合調整〉			m. 「心を落ち着かせる」
			n. 「疲労の蓄積を避ける／ほぐす」
オ〈相手の先取り発話容認〉		o. 「相手に声掛けをする」	
カ〈文字で伝達〉		p. 「記述し発話を避ける」	
		q. 「筆談」	
		r. 「インターネット、SNS 等の活用」	
キ〈サブカルチャー〉		s. 「からだに注目する」	

※斜体の部分は、吃音者等の障害者であることが明らかになる可能性のある工夫である。

また、「表 1」の中には第 1 節で述べた、波、幅、時間的推移、場面性という吃音の諸特徴に対応した工夫が含まれていると分析していくこともできよう。一つ一つの工夫の内容については、注に記載した<sup>1</sup>。本節ではそれぞれのカテゴリーの特徴を示すような工夫について代表的な例を取り上げる。なお、一つの工夫が上で述べた吃音の諸特徴の一つにだけ対応するというわけではなく、一つの工夫が複数の特徴に対応している場合もあることに留意してほしい。

まず、「波」に対応すると考えられる工夫は、この表のほぼすべてであろう。「吃音」が出ていない間に作り上げた自己イメージを維持するために、c「言い換え」をしたり、j「間をあけて発話」したりしていることがあるだろう。

ついで、「幅」に対応すると考えられる工夫は、ア〈話し方のテクニック〉の f「単語を音に分割して話す」である。これは A さんの工夫であり、言葉を単語としてとらえて発話するのではなく、一音一音に分けて発話するという「工夫」である。インタビュー場面でこの「工夫」を実践してもらったが、ゆっくりと、あまり抑揚のない話し方に聞こえた。すべての言葉をこの工夫を使って話すのではなく、最初の一音目がなかなか出てこないときに使っているということだった。もう少し詳しくこの「工夫」の適用を述べると、以下のようなになる。A さんは以前に学術成果を口頭発表する機会があり、その時にこの工夫を行ったのだが、普段の会話や面接などの場面では、工夫「f」を実践するとやや不自然に聞こえるのであまり使っていないという。つまり、「波」というほどの規則性がなく、発話に流暢性が失われることがあり、その「幅」に対応した工夫として、この「f」があるということができよう。

なお、この「f」の工夫は、通常とは違う意味ではあるが「場面性」を持っているともいえる。すなわち、A さんにとっての工夫「f」（単語を音に分割して話す）は、「吃音が発現するかどうか」が、「場面」によって異なるという通常の意味の「場面性（吃音の発現条件としての場面性）」ではなく、「f」という工夫が適切にみえる場面（学会発表場面）では使われ、適切に見えない場面（日常場面）では使われないという、「工夫の適切さ」にかかわる「場面性（吃音に対処する工夫の適切性の面から見た場面性）」を持っているのである<sup>2</sup>。

「幅」に対応する工夫の別の例としては、カ〈文字で伝達〉の q「筆談」を例に挙げることができるだろう。これは B さんの工夫であり、外国人とコミュニケーションをとるときや、窓口で切符を買うときなどによく行っている工夫であるということだった。B さんは、自分くらいの [吃音の] 重さがあれば筆談があったほうが楽だ、という表現をしていたが、つまりは、個人別の吃音症状の重さの「幅」として、比較的重症度の高い場合に、この「q」（筆談）が使われると解釈できるだろう。

なお、B さんはいつでも筆談をしているわけではなく、窓口での切符の購入時など限られた場面でのみ行っており、この点では「場面性」という特徴にも対応していると考

えられるが、それはいったいなぜなのか、どのようにしてなのか、ということが問題になるだろう。インタビュー後に議論を進めたので、本人による事実確認はとれていないが、以下のように推論できるのではないかと我々は考えている。根拠は、Bさんが、この「q」（筆談）に関しては、「聴覚障害者」として振る舞っている面もあると述べていることである。そこから考えれば、上述の工夫「f」の場合どうよう、当該の工夫（ここでは「q」（筆談））に関しての「場面選択性」の原理としては、「場面適合性」を主張することができよう。すなわち、当該の「工夫」を実践してもいぶかしく思われない場面を選択して、吃音当事者は、工夫を実践している、ということがいえるのではないだろうか。友人関係で、突然「筆談」を開始することは、従前の自己イメージや事後の自己イメージとの調整の必要を産み出すが、窓口での切符の購入のような、その場限りの対面場面であれば、聴覚障害者の振りをしても、そのような面倒なプロセスは必要とされないだろうと予想されるので、そういう場面で、工夫「q」（筆談）が採用されているように推測された。もしそうなら、合理的な採用方針であるといえよう。

「時間的推移」という特徴を示す工夫は、Bさんのア〈話し方のテクニック〉のi「発話する前に喉をつめる」、および、Cさんのウ〈工夫せず発話〉の1「頑張って発話する」から、ア〈話し方のテクニック〉のc「言い替え」の2種だろう。

まずBさんの場合から。工夫「i」はBさんの工夫であり、発話する前に少し喉をつめるようにして話すという工夫である。

工夫「i」を説明しているときにBさんは、「言う前になんかちっちゃく、その…。忘れた、昔はできたんやけどな。なんかちょっと喉を詰めてみたら。」という発話をしていたが、ここからは、まず、当初に我々が想定していたとおりの意味での「時間的推移」、すなわち、「年齢進行にかかわった吃音の状態変化、および/または、年齢進行と連動した『方法』の状態変化」が存在する、という議論を展開することができるだろう。つまり、ここでは、Bさんは、工夫「i」について、「昔は効果がある工夫だったが、いまは効果がみられない工夫だ」といっており、工夫が効を奏さない理由としては、吃音の状態変化か、あるいは、吃音に対処する「方法」の方の状態変化を根拠に挙げているようにみえるのである。「昔はできた」という発言を、「昔はこの方法が吃音に対して効果があった」ととれば、前者になるし、「昔も今も同じ方法を実践できれば効果があるのだろうが、今は方法の実践が困難である」ととれば後者になる。

しかし、Bさんは、このあと我々が驚くような、一見非合理的な発言を続けている。それは、我々が上で述べた「時間的推移」とは別種のメカニズムを構成成分とした「時間的推移」が生じているという主張とも受け取れるような発言である。Bさんの発言を紹介しよう。「まああんまりやっても意味なかった。でも今もやってるんか、今もやってるな。」とBさんは続けて語っているのだ。

ここからは、以下の推論が可能だろう。まず、Bさんは、若い頃から、それほど効果的ではないと感じていながらも、工夫「i」（発話する前に喉をつめる）を行っていた。

その後、この工夫は、Bさんの話し方の構造に組み込まれて、時間的経過にしたがって、だんだんと意識の表舞台には載らなくなっていった。つまり、今回のインタビューのように、無理矢理の振り返りをすれば、たしかにときどきに実践はしているのだが、それは、もはや、「吃音に対しての対策」という意味を失っている実践になっているようなのである。

これは「工夫」なのだろうか。もはや機能の面では「工夫」として働いていないので「非実効的工夫」というべきか。しかし、機能や効果にだけ注目しては現象の特徴の重要な部分を逃すことになるようにも思われる。そのような思考の積み重ねの果てに、我々は、このBさんの報告から、つぎのような「工夫」に関する現象の拡張的理解に至ることになる。すなわち、「工夫」には、「機能的工夫」と「非機能的工夫」があり、後者の「非機能的工夫」の例としては、生活のなかに慣習的に組み込まれることによって、「吃音との対応関係」を失うものなどがある、という理解である。つまり、「工夫」には「吃音への対処行動」としての「質」を失ったものも含まれてよい、という拡張的理解を我々はするに至ったのである。

このように考えると、障害者の生活研究をするに際しての、次のような新しい指針が得られるのではないだろうか。すなわち、「吃音当事者の現在に影響を与える吃音当事者の過去として、『障害をもつ者としての吃音者歴』だけを考慮するのでは不十分であり、『障害に対処行動をする者としての吃音者歴』を、独自の地位をもったものとして、ひとつの独立変数として考える必要がある」とも言えるのではないだろうか。これは、ラベリング論における「二次的逸脱」に関する議論にも関係すると思われるが、「二次的逸脱」の議論は、「一次的逸脱」とどのように「二次的逸脱」も「負の意味付け」を帯びたものとして考えてしまっている。しかし、Bさんの場合には、もはや工夫「i」（喉を詰めたあとに発話すること）は、「負の意味付け」を帯びていないように思われ、単純に「行動の残存効果」といってよいように思われた。同様の事象は、多く発生しているとおもわれ、この新しい探究対照群は、今後の「障害の社会学研究」にとって興味深い研究対象であるように思われた。

工夫「1:エル」（頑張って発話する）と、工夫「c」（言い換え）はどちらもCさんの工夫である。工夫「1」（がんばって発話する）は文字通り頑張って話そうとすることである。Cさんが小中学校に通っているときに行っていたこととして、「吃音がなるべく出ないように取り組んだことは、頑張ってでも言葉を発しようっていう」ことだと言っていた。学校で授業中に質問されるというような場面では、それをうまくやり過ごす、切り抜けるための「工夫」をする、というようなことはせず、「頑張って答えて」いたのだという。一方、c「言い替え」は、どもりやすい言葉を別のどもりにくい言葉に言い替えて、どもるのを避ける方法であるが、Cさんは言友会に入るまでは、この方法について知らなかったようで、言友会に入ってからこの「工夫」を行っている。Cさんの場合は、言友会に入ってから知ったから行っているということもあるが、小中学生のときか

ら言友会に入るようになり新しい「工夫」をするようになったという点で、工夫の「時間的推移」といえるのではないかと考える。

「場面性」に対応する工夫は、イ〈話す準備における工夫〉のk「原稿を使用せずに話す」を例として挙げることができるだろう。これはAさん本人が明示的に「工夫」として話してくれたことではない。けれども、Aさんが論文を発表するときに原稿を使わずに発表する、と言ってくれた話を総合して「工夫」と評価した。発話で確認するならば、Aさんは、「原稿はだめっていうか、最初からその考えた文を読むのはだめなんです。あの言いかえ<sup>3</sup>ができないので。だからあの発表でも言いかえできるところは言いかえます。原稿を作っちゃうとその通りに読まなきゃいけないっていう意識が働いて、どもりが出てしまうので。なんか大枠、その発表することの大枠だけ考えといてあとはもう適宜言いかえたり文の順番を変えたり、単語の順番を変えたりして、対応しています。」と言っている。学会発表など、原稿を用意して話す人が多い「場面」において、Aさんは原稿を作りその通りに話そうとすると言いかえができなくなってしまうので、あえて原稿を作らずに発表の流れだけを考えて話をしているというのである。一般人なら、原稿を作ったほうが話しやすいのではないかと思われるような場面でも、そのように「準備すること」が、Aさんにとっては「困難」を呼び込むことになる、というのである。どうして原稿を書くときに「言い換え」を実施した原稿を書くことができないのか、今回のインタビューでは聞き出すことができなかったが、興味深い「工夫」の実例であった。

#### 4. 考察

これまで「表1」に含まれている「工夫」について、「波」、「幅」、「時間的推移」、「場面性」という、吃音体験の諸特徴に対応するようなものとして「工夫の類別」が可能であること、ならびにそのように類別した形での各工夫の内容の説明をしてきた。3節でも少し述べたように、「表1」を概観したとき、3名とも行っているような工夫もあればひとりやふたりだけが行っている工夫もあり、「吃音」という障害の多様性を考える際に、「工夫」の多様性をも含めて考えようという我々の視角には見込みがあるといえよう。

以下の考察では、「表1」からわかるような工夫の多様性は何に由来しているのか、どのような状況、理由で工夫が使い分けられているのか、ということについて述べる。

まず、Bさんに注目する。Bさんに注目するのは、「表1」掲載のとおり、オ〈相手の先取り発話容認〉とか、カ〈文字で伝達〉という、他の二人にはない、個性的な工夫を行っているからである。Bさんのこれらの特徴的で個性的な工夫について、その工夫の特殊性はBさんの何に由来しているのか、考察していこう。

ついで、Aさんが行っている工夫に注目する。Aさんの述べる「スパイラル構造」が特徴的だからだ。すなわち、吃音が見た目ではわからない障害（非顕在的障害）である

ために、健常者だと思われてしまうが、健常者だと思われてしまうことによって、さらに吃音の症状が出てしまう、という吃音ならではの、連関してスパイラルに展開していく困難が、どのようにAさんの「生活」を形づくっているのか、考察していく。

#### 4-1. Bさんの工夫

##### 4-1-1. Bさんの工夫における洗練—“吃音者”ではなく“筆談が必要なひと”になる

「表1」を見て頂ければわかるように、オ（相手の先取り発話容認）とカ（文字で伝達）の工夫は、3人の中でBさんだけが行っている工夫である。「表1」最下部の「※」部で述べたように、表中で「斜体」を用いて書かれている「工夫」は、結果的に自分が「吃音者」をはじめとした「何らかの障害をもったひと」であることが周囲の人に知られる可能性が高かったり、吃音者であることをカミングアウトしてから行われたりするという特徴があると思われたものである<sup>4</sup>。

吃音者が行う「工夫」としては、自分が「吃音者をはじめとした障害者であること」を隠すことを目的とした「工夫」（たとえば「言い替え」等）が標準的であるように思われるが、Bさんはそうではなく、自分が障害者だと明らかになるような形での「工夫」をも、複数のやり方で行っていた。しかし、Bさんが行っているこれらの工夫は、十分に合理的で、かつ、洗練されたものであるようにも思われた。「健常者」として頑張っただけで発話するコストを払うよりも、洗練された形で「障害者としてのコミュニケーション」を採用して、状況をコントロールすることのほうが、Bさんにとって「楽」なようなのである。Bさんのこの「暴露的工夫」の背景には、障害者を一定の形で受け入れる「受容性」が「社会」の側にあることがあるといえよう。つまり、「障害者」は、「障害」を隠そうとするだけでなく、「社会の障害者対応能力」を最大化するべく、みずから「障害者として自己呈示する」ことも行っているようなのである。その中には、以下にのべるように、「社会の障害 $\alpha$ への対処能力」を「障害 $\beta$ 」をもった者が流用することも含まれているといえよう。このように洗練された方策を実行している実例としてBさんの例を解釈することができそうなのである。

以下、Bさんが行っている洗練された「工夫」について少しく詳細に述べよう。

まず、「障害者としてのコミュニケーション」として、わかりやすいq「筆談」に注目する。Bさんは筆談について語っているときに、「でもやっぱ吃音っていても症状が全然人によって、一口に吃音って言いきれないから。軽い人は全然[筆談の]<sup>5</sup>必要を感じないと思うけど、僕くらいの重さがあればちょっとあったほうが圧倒的に楽」と言っている。端的に言うと、「健常者」として頑張っただけで発話するコストを払うよりも、筆談をすること、つまり、「障害者としてのコミュニケーション」を採用することに伴うコスト、たとえば、周りから「障害者」と認識されるというコストや、一部の吃音者から異様な目でみられるというコストを払うほうが、Bさんにとって「楽」であるため、Bさんはこの工夫を行っているのだといえる。しかし、本項のポイントは、この大きな

構図ではない。この大きな構図（Bさんの合理性）を可能にする、Bさんの「工夫」がたいへんに洗練されたものである、ということを確認することである。以下、具体的な詳論を試みよう。

q「筆談」は、主に窓口で切符を買うときや、外国人とコミュニケーションをとるときに行っている、とBさんはいう。この工夫を行うことで、「健常者」として頑張るって発話するコストを払う必要はなくなる。その一方、周りから「障害者」と思われるというコスト等は増える。Bさんにその自覚はある。

「他に筆談やってるって吃音の人全然いないですよ、本当。なんかむしろ筆談とか言ったら、えっみたいな。多少引く人もいますよ。そこまでの、みたいな。」とBさんは、言う。つまり、Bさんは、自らの「工夫」の異様性を自覚している。同じ吃音者からも異様な目でみられるというコストまでがかかっていることに自覚的である。

それでも、q「筆談」という「工夫」を採用しているのはなぜか。上記で一度引用した発言が参考になるだろう。

「でもやっぱ吃音っていても症状が全然人によって [違う]、一口に吃音って言いきれないから。軽い人は全然 [筆談の] 必要性感じないと思うけど、僕くらいの重さがあればちょっとあったほうが圧倒的に楽。」というBさんの説明がBさんの理解構図を示している。この発言からわかるように、少なくともBさんにとっては、「筆談」を選択するほうが「楽」なのである。Bさんは切符を購入するときに、あらかじめメモに「日時、出発地と目的地、どの電車、指定席か自由席か、学割を使用したい」といった必要事項をすべて書いておいてそのメモを駅員に見せて購入しているという。そのため、駅員はそのメモに沿って切符を用意すればいいので、むしろ、口頭で買うときよりも時間がかからないといえる。Bさんの、「JRみどりの窓口で、A駅からB駅まで新幹線自由席を本日とか、口で言ったらめっちゃ長いじゃないですか」という。この発言からは、「筆談」という“コミュニケーション類型”が、たとえ障害者向けの“コミュニケーション類型”であったとしても、一方的な負担を対応者側に強いるものではないことへの言及意欲が感じられる。つまり、総合的なコスト構造を考慮すれば、「筆談」を採用することを、対応者側に強いたとしてもそれほど不当ではない、とBさんは主張しようとしているようなのである<sup>6</sup>。

けれども、「筆談」という“コミュニケーション類型”をBさんが「工夫」として採用していることに関してもっとも興味深い点は、そこではない。「工夫」の洗練のされ方と、その結果、Bさんのアイデンティティ呈示の様相が、Bさんにとって受け入れ可能な水準になっているように見える点が、より重要である。つまり、Bさんにとって「筆談」という「工夫」を採用することは一種の“偽装”ではあるが、単純な偽装ではないのである。つまり、「筆談」という「工夫」を採用することを通して、Bさんは、自らを吃音者であるというよりは、“聴覚障害者に代表されるように筆談を必要としている人”として呈示しているようなのである。そして、これは「吃音者ではなくて聴覚障害

者である」という形で偽装することとは異なるのである。Bさんの証言を聞こう。

「やっぱ筆談とかも僕だけがっていうんじゃないくて、聞こえない人はたいていみんなやってることやし、そう考えたら別に特別なことでもないし。筆談とか受け入れられるっていうのもやっぱ聞こえない人らがやってることやからっていうのもありますよね。」とBさんは語っているのである。Bさんが行っているオ・カの工夫は、吃音者をはじめとした障害者であることが明らかになるような工夫であると上述したが、o「相手に声掛けをする」（吃音なので発話に詰まっている場合にはフォローしてと、会話相手に頼む）という「工夫」を採用する場合とは違って、少なくともq「筆談」に関してはBさんは、みずからが「吃音者」であることを「隠し」つつ、他の障害であることも確定させないことに成功しているのである。「吃音者」のかわりに採用されているアイデンティティは「筆談を必要としているひと」であるが、このカテゴリーについては、「別に特別なことでもない」という発話からわかるように、低いスティグマ性が理解されているのである。高度で洗練された戦術であるといえよう。

q以外のo、pの「工夫」にも同様に、洗練された部分がある。以下o、pの工夫について説明していこう。

o「相手に声掛けする」という「工夫」は、実例が我々との会話中に存在した「工夫」である。すなわち、Bさんが我々に向かって「言い替え」という言葉をいおうとしたときに、どもってしまって少し時間がかかった後で、我々に「言葉が出てきにくいときとかなんか次これ言いたいのかなって大体わかったら言って下さると[助かります]」と声をかけてくれた、そのときにBさんが実行していた「工夫」である。つまり、Bさんは我々に〈先取り発話〉をするよう促してくれたのである。これは、「隠蔽系」の「工夫」ではない。Bさんがこのとき行っていることは、Bさん自身が「〈先取り発話〉を必要とする障害者」であることを自己呈示するとどうじに、コミュニケーションの相手に対して、「そういう障害者に対してのコミュニケーションやり方」を「教示」し、その「教示に従ってもらおう」ことを要請するようなコミュニケーションである。つまり、相手に「障害者に対してのコミュニケーションスタイル」に切り替えを促す限りで、みずからの「障害者性」を呈示するという意味では、q「筆談」とほぼ同様の洗練されたコミュニケーション戦術、すなわち、必要にして十分なコミュニケーション戦術を採っているようなのである。

p「記述し発話を避ける」で表示されている「工夫」とは、大学での語学の授業において、教室内で日本語訳を発表する場合にどもることが多かったので、代替的に、自分のノートに日本語訳を書き、日本語訳を教員に見せるようにした、という「工夫」のことである。

この「工夫」を始める前は、授業中に他の学生と同じように日本語訳を口頭で発表していたという。つまり、Bさんは休学前には、この「工夫」を行っておらず、復学後に行い始めている。この変化は何によって説明されるだろうか。Bさんはこの工夫を行うよ

うになったきっかけを以下のように語ってくれた。

「それ[授業で日本語訳を発表すること]をするのもなんか結構しんどいなと思って。これまで多少無理してたので、まあいっか」と思ったという。そして、休学後「時間が経って、そんなみんなと同じように頑張らなくてもいいや、みたいな考えになってきたってことだと思います」と語ってくれたのである。

つまり、「休学」によって、「みんなと同じでなくていい」と思えるようになったこと、すなわち、「異質性の被認識コスト」が相対的に低下した、ということが、この「工夫」を採用するきっかけになったと推測することができるだろう。休学してしまえば、教室内で「異質」であることは、はじめから B さんの属性となってしまう。したがって、総合的な「コストベネフィット」構造は、この「工夫」を実施しやすく変化した、といえるのではないだろうか。

#### 4-1-2. 暴露的「工夫」を可能にする構造の究明

B さんは、発話すること、つまり健常者としてのコミュニケーション様式を追求することに伴うコストベネフィット構造よりも、o, p, q の工夫のように、障害暴露的戦術を採用した際のコストベネフィット構造（部分的に「障害者としてのコミュニケーション」を採用することに伴うコストベネフィット構造）のほうが、有利だ、という合理的選択をしていたようだった。そして、この B さんにとっての「有利さ」は、B さんの行動に関わる単純な有利さではなく、コミュニケーションの相手から「配慮」を引き出すことが可能で、かつ、その「配慮」を引き出すことに伴うスティグマが小さい、という構造を活用しての有利さであった。

けれども、これだけの説明では、なぜ他の吃音者が B さんのような「工夫」を行わないのか、という問題が解消できない。そこで、以下のように思考実験をして、どのような構造が B さんに暴露的な「工夫」を可能としたのか、考えて見よう。

吃音者が、「口頭」でコミュニケーションをしている場面と、「筆談」でコミュニケーションをしている場面での「総利益<sup>7</sup>」のそれぞれに、まず、番号をつけよう。そうすると、「#1 口頭発話することに伴う総利益」、「#2 筆談することに伴う総利益」、の2つになるといえる。ここで B さんは実際には筆談をしていることから、 $E\#1^8 < E\#2$  となっているといえる。また、筆談を行っていない他の吃音者は  $他\#1 > 他\#2$  となっているといえる。では、どのような場合に、このような違い（逆転）が生じるのだろうか、推論を続けて行こう。

つまりは、#1 か #2 のどちらかに B さんと他の吃音者で差が生じているという2つの場合と、#1 と #2 の両方に差が生じている場合の合計3つケースが考えられるのである。

- ① B さんの #1 < 他吃音者の #1 (B さんの #2 ≒ 他吃音者の #2)
- ② B さんの #2 < 他吃音者の #2 (B さんの #1 ≒ 他吃音者の #1)
- ③ B さんの #1 < 他吃音者の #1 かつ、B さんの #2 > 他吃音者の #2

①は、Bさんの#1（口頭発話すること）をすることに伴う総利益のほうが、他の吃音者の#1より小さいことを表している。今回の事例でいえば、Bさんの発話に伴うコストが大きく、かつその場合の吃音への対処が難しいということを示しているといえる。つまり、吃音が重度で隠しがたく、コミュニケーションへの負荷が大きい場合に、Bさんの暴露的工夫が、より可能となるのだといえる。

②は、Bさんの#2（筆談すること）に伴う総利益のほうが、他の吃音者の#2より大きいということがあった場合、成り立つ不等式である。#2に伴うベネフィットは、切符が買える場合、吃音の程度にかかわらずほぼ一定であると考えられるため、変動を検討しなければならないのは、コストのほうである。筆談することに関わるコストは、具体的には、「筆談」という健常者とは異なるコミュニケーション方法を採用することに伴う「スティグマ」のコスト（順番を後回しにされるようなことも想定される）や、相手に自分の希望に合わせてもらうことに対する心理的なコスト等が考えられる。前者のコストは、準備を念入りにすることで減少させることができるだろうが、後者はそうはいかないだろう。そのように考えるのならば、Bさんの解釈枠組みの理解が重要となる。以下、Bさんの解釈枠組みに焦点を当ててしばらく検討していこう。

前項でも触れたようにBさんは筆談について、「やっぱ筆談とかも僕だけがっていうんじゃないで、聞こえない人はたいていみんなやってることやし、そう考えたら別に特別なことでもないし。筆談とか受け入れられるっていうのもやっぱ聞こえない人らがやってることやからっていうのもありますよね。」と述べていたが、この筆談のコストを低めに見積もっているともいえる発言の背景は、Bさんが、SNS（ソーシャルネットワークサービス）を通してある聴覚障害者の考え方に触れたことだという。以下、はその聴覚障害者に関してのBさんの発言である。

「[その聴覚障害者の人が] 何を書くかっていうのは聴覚障害のことも書くけど、まあ障害とかの考え方とかですね。で、それがすごいおもしろいんですよ。吃音ともかなり密接にかかわってるんで。そういうのを読んでほかの障害でも吃音と同じ問題が出てくるんやなって。」とBさんは発言する。続けて「なかなか出会えないじゃないですか吃音以外の障害の人。そんな普段しゃべらへんけどツイッターとかで調べたらぱっと出てくるし、フォローしたらずっと見ることになるし。だからそれは大きかったな」とも発言している。聴覚障害者との交流に関して言えば、Bさんは対面コミュニケーションレベルで「聞こえる人と聞こえない人がコミュニケーションとるっていうのを主眼にした団体」にも参加したことがある。そして「聴覚障害の人らと連携できる部分っていうか協力し合える部分は絶対[ある]というか。たとえば、そのSSS[Bさんが参加した団体の名称]も筆談カフェとかいって筆談だけで話すときとかもありますけど、それなんか吃音ばっかりですよ。」と発言していた。

以上のようなBさんの発言から、次のことがいえるだろう。SNSを通じてある聴覚障害者の考え方に興味をもったり、実際に聴覚障害の人が参加している団体に行ったり

する中で、「やっぱ筆談とかも僕だけがっていうんじゃないで、聞こえない人はたいていみんなやってることやし、そう考えたら別に特別なことでもないし。」と「筆談という手段」を共有化することに対する抵抗感を和らげていった、ということが言えそうなのである。その際、上記の“連帯”意識を高めていったという経緯をかんがえれば B さんが「聴覚障害者を偽装した」というより「筆談を必要とするひととして振る舞った」（これは“偽装”という必要がないかもしれない）という方が適切だろう。そのような“洗練”のなかに、B さんの「筆談」にかかわる「心理的コストの低下」の仕組みがあった、といってよいのではないだろうか。

③は、B さんに当てはめるのならば、B さんの#1 に伴う総利益のほうが他の吃音者より小さく、なおかつ、B さんの#2 に伴う総利益のほうが他の吃音者よりも大きいということである。じっさいの B さんはこの③ケースであったと思われる。したがって、他の吃音者があまりやらないような「工夫」を行ったといえるのではないだろうか。

#### 4-1-3. B さんの「潔さ」－「軽度障害」への対処としての「暴露的工夫」

本項では、B さんの「潔さ」について、述べて行こう。

『軽度障害の社会学』の著者である秋風は、「軽度障害者」について、以下のように述べている。「重度の障害者ではなく、かつ健常者でもない、自身をいわば中途半端な位置にあると感じている人のなかには、障害者手帳の区分に該当しないくらい軽微な障害の人や、顔に痣のある人や吃音の人のように、法は障害者と規定しないが、自身を健常者と感じられない人もいる」（秋風、2013:56、下線は引用者）。すなわち、吃音を軽度障害として扱っている。

そして、軽度障害者は、「可視的なインペアメントと比較し、軽そうに見える方はそれほどたいへんではない、つまり障害による不利益も相応に小さく、したがって心痛はさほど重くはないだろう」（秋風、2013:57）と判断されることが往々にしてある、と述べられている。さらに、「軽度障害者は健常者社会にあって圧倒的にマイノリティの立場におかれる。しかし、健常者の価値観や、障害のヒエラルキー、社会通念を内面化していることで、障害者を個人的悲劇に見舞われた劣位の存在とみなしがちである。だから、障害者にアイデンティファイできにくい。かといって、健常者にアイデンティファイすることもできない。」（秋風、2013:63）と「軽度障害者の困難」を定式化してくれている。

つまり、軽度障害者の多くは健常者社会で生活しており、おおくの場面ではうまく健常者としてやり過ごすことができているにしても、「日常生活でふとしたことから障害者であると感じさせられてとまどい、あるいは凍りついた」（秋風、2013:63）経験をして「健常者社会から疎外されている」（秋風、2013:63）と感ずることもあるのである。

このように、自らの「障害者性」に直面した場合において、「軽度障害者の困難」がはっきりとする。すなわち、「軽度障害者」の多くは、健常者の価値観を内面化してし

まっているので、障害者として生きていくことが容易な場所であっても、そのような選択をしにくいのである。

ここにBさんの「潔さ」の方法的工夫的価値がある。Bさんは、自分を吃音者として自己呈示することも、「〇〇を必要とする障害者」と自己呈示することもあるが、そのいずれにおいても、上記の「軽度障害者」の困難を乗り越え得ているのである。

秋風は、弱視であるAさんが自立生活をする重度障害者に出会ったときに以下のようには話したということを確認している。「自立生活する〔肢体不自由な〕重度障害者に違和感をもつことはないですね。そういう生き方もありかとか。あれだけ割り切れたらいいなあとか、憧れるわ。カッコええなあと思った。・・・中略・・・(Aさん、31歳女性、弱視)」(秋風、2013:71)。この発言を受け、秋風は「自立生活をする重度障害者は輝いて見える。そこに至る道は決して平坦ではなかったであろうが、『私らそのまま生きていてもいいやないか』というメッセージは潔く聞こえる。『それがでけへんのがまた軽度』なのである。軽度障害者は割り切れない。」(秋風、2013:71)とまとめている。

つまり、「軽度障害者」の困難のいくらかの部分は、“潔く割り切れないこと”に由来する、という理解を秋風は示しているのである。これに対し、Bさんは「潔い」。Bさんは今まで述べてきたように、健常者としてふるまうよりも「障害者としてのコミュニケーション類型」に沿った自己呈示をし、その中で、対話者からの支援を引き出す方向を積極的に採用している。これは「割り切った」「潔い」行動であるといえよう。

ここまでの話をまとめよう。障害があまり顕在しないから、本人の苦悩は小さいと自動的に言うことができるわけではない。軽度障害であるがゆえの苦悩、非顕在的障害であるがゆえの苦悩、ということがあるのである。そのような状況があるときに、いろいろカテゴリー上の工夫をしながらとはいえ、暴露的な活動をすることは、一つの救済でありうるだろう。Bさんの「潔さ」をこのように「軽度障害の困難さからの救済としての潔さ」と定式化することができるのではないだろうか。

#### 4-1-4. 暴露的工夫への心理的抵抗とその乗り越え要因の検討

ここまで、Bさんが「障害者としてのコミュニケーション類型」を採用していることの合理性、そして、その合理性の一部として「軽度障害問題」との関係があるだろうことを見てきた。

そういうこれまでの議論に比べると社会学的含意は小さいが、Bさんの心理的抵抗とその乗り越え要因に関して検討し、推論に過ぎないが「有名校への進学」や「クラス集団からの相対的自立性の獲得」が関係しているかもしれないことにも言及しておきたい。

じつは、Bさんには「筆談への心理的抵抗」というものがあつた。その抵抗感がどのように乗り越えられたかという問題にとって重要な証拠は、以下のBさんの発言である。

「やっぱ筆談するってのは一般的じゃない方法じゃないですか。で、それをとるって

いうのは自分がそういう話すって点で一般的じゃないってことを認めることになるんで、かなり心理的抵抗がありました。だから高校生くらいまではどれだけでも絶対筆談なんてしなかったし、ただ、〇〇大学入って△△大入ってとかしてるうちにある程度吃音を、今の現状を受け入れるっていうことを始めて。だったらとにかく伝えられたらそれでいいと思うんで、筆談が有効だったらそうしようって。」(下線は引用者)とBさん語っているのである。上で言及されている「〇〇大学」も「△△大」も、地域の有名大学である(入試の偏差値ランク的には、△△大の方が若干上である)。

Bさんは、筆談をするのに、高校までは「心理的抵抗」があったのだが、「〇〇大学入って△△大入ってとかしてるうちに」その抵抗を乗り越えることができるようになっていく。ここから一つには、有名大学に入学したことが、この乗り越えに有意義であった、という仮説を立てることができよう。

けれども、もう一つの仮説も立てることができる。Bさんは、中高生のときについて、以下のように述べている。「なんかねえ学校が居心地悪かったんですよ。中堅の進学校の男子校なんですけど、私立の中高一貫で。だから、なんていうか、とにかくいい大学に行けみたいな。全員男子で、学校が狭くて。狭い学校の中の世界しかないみたいな。人生すなわち学校みたいな感じで。人生すなわち学校だから、試験でいい点をとるか、部活で成績をあげるかですよ。人生の目標はそのどちらかですよ。まあこれ極端に言ってますけどね。」と。そして、「吃音の症状自体はそんな変わってないけど中学2年から高校2年くらいの方が今より圧倒的に悩んでましたから。」「まあそれは吃音を受け入れることができないっていうことですかね。」「だから周りにも一切言わなかったし、学校なんかでも。」と言っていた。

一方で、小学生のときの状況に関しては、「小学校は居心地がよかったですよ。今の公立小学校最高やって感じで。言葉の教室とかもちゃんとあったし、みんな理解あったし。」「小学校ではからかいはあるけど、継続はしなかった。つまり、先生が絶対注意したし、周りの子が代わりに言うてくれたり。」「だからよかったな。小学校が結構こぢんまりしてて、一学年60人弱やったんですよ。で、27,8人が1クラスやから、ずっとみんな知り合いやって。6年間そうで、気心しれてるわけですよ。あれは居心地よかった。」と言っている。

さらに、小学校の時の状況と中高の時の状況を比べて、「私立の中高一貫校ではことばの教室なんかないですからね。」「先生も吃音とか無視ですから。公立小学校が、ちゃんと僕が吃音があっても、先生も知ってたし、周りも子どもらも知ってたし、ああ居心地よかったな。」「[中高は]なんか1学年1クラス45人とかで。あれはちょっとよくない。しかも全員男子やし。勉強できたらそれでえらいみたいな感じですよ。だめですわ。」と言っている。つまり、吃音に関するクラスや学校の雰囲気として、中高の時代の問題点を強く主張しているのである。

Bさんのこれらの発言から、中高生のときは学校に閉塞感を感じていて、かつ、吃音

について悩んでいたことがわかる。学校生活に閉塞感があるということと、吃音について今よりも悩んでいたということとの間には関係があるといえよう。

閉塞感のある中学・高校生活を終え、Bさんは大学生となり「吃音」を、「受け入れ」られるようになった。そのことに連動して、「だったらとにかく伝えられたらそれでいいと思うんで、筆談が有効だったらそうしようって。」と、「筆談」もするようになった。このようにBさんが「心理的抵抗」をこえて筆談を実際に行うようになったこと背景には、被差別的な閉塞感のある高校を卒業したことと、Bさんが有名大学へ進学した、ということの両方が関係しているように思われた。世間に名が知られている大学に通っていることは、本人のアイデンティティを強化すると思われ、その分「吃音者であること」を知られることや、「筆談が必要な障害者と思われること」への心理的抵抗が小さくなるのではないだろうか。あまり分析的ではないが、当人の発言からは、そのようなストーリーを考えることができた。

#### 4-2. Aさんの工夫

次に、Aさんに注目して考察していく。Aさんが行っている工夫は、a「言い替え」、d「間投詞の使用」、f「単語を音に分割して話す」、g「話すタイミングをつくる」、k「原稿を使用せずに話す」で、a～gはア〈話し方のテクニック〉、kはイ〈話す準備における工夫〉である。Aさんは、「スパイラル構造」に敏感である。

「なんかどもったときに相手がどう思うかっていうのを考えてしまうわけなんですよ。だからまあそうなると、どもらないようにしゃべろうっていう意識が大きくなってそれがまたどもりを誘発する。」「どもりが出始めてから、しゃべらなきゃいけないときになって、どうやってしゃべるかとか、そういうふうなコントロールする術を考えるようになってくる。勝手に別になんかどっかで勉強するか本に書いてるとかじゃなくてなんかもう勝手にできるようになってくる。」

これらの発言から感じられるのは、吃音者であるということが、吃音への対処法の実践者である、ということと深く重なっているということである。

さらにAさんは以下のようにも述べている。

「スラスラとしゃべるだろうなと相手が思ってるっていうのを僕は意識するわけじゃないですか。なんていうかな、向こうの期待なんですよ。これを僕が意識してしまうとどもるんですよ。」「まあ発達障害の一種なんでなんていうか、ぱっと見では気が付きにくいというか、実際に接してみて、なんか発達障害だとか、吃音だなんていうのを知ることになるんで。身体障害ってもうぱっと見で、この人は障害者だなんていうのはわかりますけど、精神障害とかまあ発達障害の一種なんで、ぱっと見ではわからなくてしゃべったらそういうのがわかるっていうのがまたつらいというか。ぱっと見健常者なんですけど。健常者と思われてるというか、スラスラしゃべるだろうという、その相手の思いがやっぱりどもらせるみたいな。」<sup>9</sup>

つまり、吃音については、何か関係性の障害であるかのような、その原因が吃音者側に一方的に存在するとは到底いうことができない「相互関係」に関連した障害であるというイメージが A さんにはあり、そこに対処の困難さの根拠を置こうとしているようなのである。

秋風（2013）は、「軽度障害」に固有の、相互行為のなかでスパイラルに進行していく「二次的障害」のあり方を、以下のように2段階に分けて、記述している。

まず、非顕在的障害には、「質問される」というリスクがあることを以下のように確認している。

「白杖・車椅子といった記号をもっている障害者、できないことがはっきりと見てとれる障害者は、なぜできないか、なにができないのか説明を求められることはあまりないだろう。白杖・車椅子といった記号は、それ自体が障害を雄弁に語るからである。しかし、記号のない障害者や、見た目にはわかりにくい障害者、あるいは医学的に新しく発見され『障害』であると認定された障害者は、できないこと、できにくいことが外見からわかりにくい場合が多い。そういった障害者にはしばしば容赦のない質問が待ち受けている。」（秋風，2013:67）と述べるのである。

その後、この「質問」には、容易に答えることができない場合があることを述べている。そういう展開に至る例として、手が不自由で、重い荷物を持つことができない女性（母親 F）が子どもを連れて買い物に出た場面を挙げている。

「子どもが小さいとき、小学生と幼稚園のふたりが〔荷物を〕いっぱい、牛乳とか持ってくれるんですよ。わたしお財布しか持たなくて。〔買い物の途中で知り合いに会うと〕あら、ごきげんよう。なにあなた、子どもに〔重い物持たせて〕とか言われる。で、わたしはその人達にはいちいち手が悪くてことをいわなくちゃいけない。いやわたし持たないから持ってもらってると言う、〔相手の人が子どもに向かって〕たいへんねとか、ママに付き合わされてとか〔言う〕」（秋風，2013:67）

ここで起きていることについて秋風は、「この場合、相手には F さんが母親の役割を果たしていないように見えており、どうして果たせないのかが問われる。」（秋風，2013:67）と述べている。しかし、問題は「問われる」ことだけではない。世の中には、複数のカテゴリーと規範のセットがあり、ある説明によって、ひとつのカテゴリーと規範のセットが場面に関して問題ないものとして了解可能になったとしても、別のカテゴリーと規範のセットに関しては、問題性を保持し続けることがあるのである。

つまり、「大人と子ども」というカテゴリー対に対しての期待されている「大人は重い荷物を持ち、子どもは軽い荷物を持つ」というような内容に関する「質問」ならば、母親 F の「言い訳」（たとえば、「私は手が悪くて重い荷物を持てないんです」）による説明で対処可能かもしれないが、そのような説明をしたとしても「子どもを保護すべき母親」と「保護されるべき子ども」というようなカテゴリー対に関しては、上記の「言い訳」が説明として機能しない、ということがあり得るのである。そして、後者のカテゴ

リー対が一瞥してふさわしいような出会いでは、母親 F は、説明に窮することにもなりかねないのである<sup>10</sup>。

そして、この、手が不自由な母親（以下、F さん）と A さんの困難には共通する側面があるように思われるのである。つまり問題は単に「軽度障害者」が「記号のない障害者」であるということだけでなく、そのような「記号のない障害者」には、言い訳的説明が困難な事態が生じる可能性がいろいろある、ということが問題となるのである。

もちろん、健常者では釈明しないで生活できるところを、F さんや A さんは釈明を求められる、という前半部の話も重要ではある。それは、言ってみれば、「釈明しないで生きる権利のはく奪」ともいえる事態だからだ。

けれども、それだけでは「スパイラルな問題構造」ということはできない。より重要で困難な問題は、彼らに、釈明が求められることだけでなく、その行った釈明や、釈明をしないで済ませるようにするための「工夫」が困難を増幅する可能性があること、あるいは、問題の維持に貢献する可能性があることであり、そのような「スパイラル構造」から逃れることが容易ではないこと、である。

たとえば、母親 F さんにおいては、手の障害を丁寧に説明すればするほど、母親の責務に無自覚であることを表示している、と解釈される可能性があるのである。同様に、吃音者 A さんにおいては、少し推論的議論を付け足してしまうことになるが、どもったあとの相手の反応を予期して、「言い換え」をした場合、その「言い換え」による誤解リスクを A さんは理解しているが、相手側は理解しておらず、相手にも「言い換え」のリスクを理解してもらおうとする場合、その説明を「言い換え」等によって流暢にってしまうことは説明の説得力を低下させてしまうので、結局「言い換え」という「工夫」は不発に終わらせざるを得なくなる、というような「スパイラル構造」があるようなのである。つまり、どもることに関する問題圏からは結局逃れることが困難である、というような状況が存在しているようなのである。

以上で、A さんについての議論を終えよう。論文における議論の形式を整えるのならば、ここで C さんについての分析も記載するべきだろうが、おおむね主張したい内容は A さんと B さんに関する分析で書き切ったので、次節では「おわりに」を書くこととする。

## 5. おわりに

本稿では、まず吃音を、軽度で非顕在的であり、波と幅と時間的推移と場面性があるという特徴をもったものとしてとらえ、記述した。その際、いわゆる吃音だけが、これらの特徴を持っていると考えるのでは無く、吃音に対処するための「工夫」もまた、時間的推移や場面性という特徴を持っていると考え、その全体を「生活の中の障害」として社会的に記述した。

さらに、本稿の特徴は、「吃音」本体よりは「吃音への対処行動としての工夫」の方

なので、今回インタビューに応じてくださった3名のインフォーマントのそれぞれについて、特徴的な「工夫」を、「表1」にまとめた上で、それらの「工夫」がどのようなものとしてあり、どのような含意を持ちうるのかを、社会学的に考察した。

そのうえで、AさんとBさんの2名に特に注目し、彼らの工夫の特殊性から、吃音への「工夫」において、自己呈示の洗練ということがあること、および、吃音が「非顕在的」障害であることに関係した「スパイラル構造」が、社会的なメカニズムとして存在しているだろうことを主張した。

これらの諸主張をするなかで、吃音が「軽度障害」であることや、「コミュニケーションの障害」であることが、吃音にかかわる現象に社会的な特徴をどのように与えているのか、というメカニズム的な部分については、特に強調して述べるようにした。と同時に、「吃音者であること」を資源として、社会関係の拡大や社会的資源の積極的活用につなげるような道筋も、実際の吃音者の生き方のなかに開かれつつある、ということも示すようにした。

大人になってからも維持される吃音については、一時的に症状が改善することはあっても再発する場合が多く、吃音とともに生きていくことが重要であるような障害であるとみなすべきだと思われる。つまり、吃音者には、生涯をかけた「吃音」とのつきあいの仕方の洗練が要請されるのであり、その洗練のなかには、対処行動の洗練、すなわち「工夫」の洗練も含まれるだろう。本稿では、この吃音者の洗練された/されつつある「工夫」の方に焦点をあてて議論をおこなった。この洗練された「工夫」のありようの探究こそは、吃音者にとってはもちろん、吃音をもっていない人にとっても、人間の生き方を考えるうえでのヒントになるものである、と考えられる。

本稿の冒頭にもどってその意義を確認するならば、BさんやAさんの生き方に典型的なように、「吃音」は問題であるだけでなく「吃音」と「吃音への工夫」の中に、「人生の機微」や「社会/他者との交流のきっかけ」を見ることもできるものであるように思われる。他者を巻き込んで人生を組み立てるダイナミックな生き方を開始するきっかけとして、「吃音」と「吃音への工夫」を考えること。そういう研究の嚆矢に本研究がなっていることを願うものである<sup>1)</sup>。

---

[注]

<sup>1)</sup> 以下この注1では、「表1」の中の諸項目について意味を詳述しておきたい。

ア〈話し方のテクニック〉

これは、話す時になるべくもらないように行う、テクニックのような工夫をまとめたカテゴリーである。

ア-a「言い替え」

Aさんの工夫。これは、言いづらい言葉を同じような意味の言葉に言い替えて話すという工夫である。Aさんは「駅まで歩く」と言いたいのが「歩く」が言いづらい場合、「駅まで徒歩で行く」と言いかえるという例を用いて説明していた。「徒歩で行く」と言うのはおかし

いわけではないが、「歩く」と言ったほうが自然かもしれない。しかし、「徒歩で行く」と言い換えるしかないのである。

#### ア-b「言い替え」

Bさんの工夫. aと同じように言いにくい言葉を言い替える工夫である。言い替えを行った結果、最初に言いたかったことが伝わらなくなる、といったことがあまり生じなければ成功したと感ずることになる。しかし、「言い替え」は、しばしば、本当に言いたい言葉で話しているわけではなく、「ベストな発言」から少しずれてしまうので、多用するとそのズレが目立つように感ずることがある、という。

#### ア-c「言い替え」

Cさんの工夫. a, bと同じように、別の言葉に言い替えてどもるのを避ける方法である。Cさんは言友会に入ってから、この工夫を行っている。言友会に入るまでは、この方法について知らなかったそうだ。

#### ア-d「間投詞の使用」

Aさんの工夫. 言いづらい言葉を言う前に「あの」や、「えーっと」という「間投詞」を前置することで、最初の言い出しが言いづらい言葉ではなく、「あ」や「え」に変わることによって話し易くすることを狙った工夫。しかし、場合によっては、「えーっと、(1拍)Dです。」と間投詞のあとに一拍空くので、結局言いづらい言葉から言い始めることになり、それを意識してしまっ、どもってしまうことになることもある。この工夫はたまに成功することもあるが、使えないときも多いという。

#### ア-e「間投詞の使用」

Bさんの工夫. Aさん同様に、言葉が出づらいときに「えーっと」「あのー」と「間投詞」を挟んで発話する工夫である。「言葉が出にくいときとかに言うけどあんま意味ないですよね」と言っていた。

#### ア-f「単語を音に分割して話す」

Aさんの工夫. 言葉を単語としてとらえて発話するのではなく、一音一音に分けて発話するという「工夫」であり、ゆっくりと、あまり抑揚のない話し方に聞こえる。イメージとしては、「吃音」ではなく、「き、つ、お、ん」と分割的に発音するやり方。Aさんは以前論文を発表する機会があり、そのときにはこの話し方を使っていたようである。一音目がなかなか出てこない時があり、その時にこの工夫を使うことが多い。普通の会話や面接の時などはやや不自然になるように感ずるのであまり使っていない。発表する全部の言葉をこのような話し方で話すのではなく、言いづらい言葉だけに、この方法を用いて話すようにしているという。

#### ア-g「話すタイミングをつくる」

Aさんの工夫. 多くの吃音者は歌をうたう時にはどもらないと言われているが、Aさんも同じように歌う時にはどもらない。歌はうたい出すタイミングが決まってお、用意されているタイミングに合わせて言う(歌う)ことができるのでどもらずに歌うことができる。しかし、吃音者はそのタイミングを自分でつくることができない、だからどもる、と最近の研究でいわれていることとして、AさんがAさんのメカニズム理解を説明してくれた。このタイミングを作りだすために身体の一部をある一定のリズムで動かして(たとえば、指で足を叩くなど)その動きのタイミングに合わせて話すようにする「工夫」のこと。

Aさんは中学生のときに自己紹介ができずこの工夫を始めた。中学生のときはこの工夫でどうにか切り抜けていたが、高校生になってからは通用しないようになったという。Aさんはこのような工夫について、「なんか慣れっていうかこれがまた不思議でこういうしゃべるテクニックっていうのは一回使うとなんか効果がどんどん小さくなっていって使えなくなってしまうんですね」と言っている。

ア-h「どもったときに手を動かす」

Bさんの工夫. 文字通り, どもったときに手を動かす, という工夫である. Bさんは, 「なかどもったときは, こう手をこうやるとかそんなんは今でもやってると思うけどな. こうしたほうがやりやすい感じはしますね.」と語っている. しかし, あまり根本的に解決するわけではないと感じているようである.

ア-i「発話する前に喉をつめる」

Bさんの工夫. 発話する前に少し喉をつめるようにして話すという工夫である(“喉を詰める”とは声門閉鎖のことと思われる). Bさんは, 「言う前になんかちっちゃく, その…忘れた, 昔はできたんやけどな. なんかちょっと喉を詰めてみたら.」と言っていた. 「まああんまりやっても意味なかった. でも今もやってるんか, 今もやってるな」と語り, それほど効果的ではなかったと感じているようであるが, 思えば今でも行っているかもしれない, というように蓄積的に維持されている工夫であると思われる.

ア-j「間をあけて発話する」

Cさんの工夫. c「言い替え」は言友会に入ってから行うようになったというので, 他にも言友会に入ってから行っている工夫はあるかと尋ねると, この工夫について語ってくれた. Cさんは, 最初の言葉でどもったとしても, その次の言葉はどもらないで話せることが多いので, 最初の言葉がなかなか出てこないときには, 少し間をあけて話すようにすることで, スムーズに話すことができるという. 「まあどうしても吃音があると頑張ってもしゃべらなきゃいけないっていう焦りが出てしまうんで, その焦りを無くすために, 最初の言葉がなかなか出てこなかったときに少し間をあけるっていうことを意識し始めました」とCさんは語っている.

イ〈話す準備における工夫〉

ア〈話し方のテクニック〉に関連しており, 話す場面のために準備する段階での工夫である.

イ-k「原稿を使用せずに話す」

Aさんの工夫. Aさん本人が「工夫」として話してくれたことではないが, Aさんが論文を発表したときに, 原稿を使わずに発表したというやり方を工夫と考えることができる. Aさんは, 「原稿はだめっていうか, 最初からその考えた文を読むのはだめなんです. あの言い換えができないので. だからあの発表でも言い換えできるところは言い換えます. 原稿を作っちゃうとその通りに読まなきゃいけないっていう意識が働いて, どもりが出てしまうので. なんか大枠, その発表することの大枠だけ考えといてあとはもう適宜言い換えたり文の順番を変えたり, 単語の順番を変えたりして, 対応してます.」と言っていた. また, 「一言一句その通りに読まなきゃだめっていう状況がもうだめなんですよ一番. まあ自己紹介もそうですね. 大学名とか自分の名前とか. まあそういうことがだめですよ.」と言う. そして, 一言一句決められた言葉を話す, 読まなければならない状況では, f「単語を音に分割して話す」という工夫を使って, どうにか軽くどもれるようにしているという.

ウ〈工夫せず発話〉

このカテゴリーは, 特に「工夫」といったことをせずに発話することも「工夫」の一つと考え挙げた.

ウ-l「頑張って発話する」

Cさんの工夫. 「頑張って発話する」は, 文字通り頑張って話そうとすることである. Cさんが小中学校に通っているときに行っていたこととして, 「吃音がなるべく出ないように取り組んだことは, 頑張っても言葉を発しようっていう[態度を取っていた]」ことを挙

げていた。学校で授業中に質問されるという場面で、それをうまくやり過ごす、切り抜けるための「工夫」というようなことはせず、「頑張って答えて」いたのだという。

#### エ〈心身の総合調整〉

ウ〈話す準備における工夫〉は話す前に原稿を用意しないという行動レベルとしての工夫であったのに対し、エ〈心身の総合調整〉は、話すことも含めて行動を始める前に自分の心や体の状態を整えるという工夫である。

##### エ-m「心を落ち着かせる」

Cさんの工夫。どもるかもしれないと思ったときに、一旦心を落ち着かせることである。話すことも含めて、行動を始める前に、Cさんが最初に想定したように物事が進むよう、慌てずに一旦間を置くようにしているという。Cさんは言友会の例会の司会なども担当しているのだが、その司会の前には、頭の中でどのようにしていくかを考えてから取り組むようにしているという。仕事においても、「やっぱりまあ要所要所において心を落ち着かせるってことで、最初の言葉が出やすくなるので心を落ち着かせるってことをよくやってます」という主張をしていた。

その結果、成功したと思うことと、あまりうまくいかなかったと思うことは半々くらいと感じていた。成功したと感ずるのは、「言いやすい言葉で言い始めるようにした時」などである。反対に、仕事や言友会のことなどで忙しくして「相当疲れているとき」に、うまくいかなかったと感ずるという。疲労が蓄積されていると言葉もなかなか出てきづらく、逆にあまり疲れていないときは周りの人と気軽に話せるという印象をCさんはもっていた。

##### エ-n「疲労の蓄積を避ける／ほぐす」

Cさんの工夫。Cさんは疲労感が大きくなると、言葉も出づらくなると感じていて、疲れをためないようにすることを大切にしている。疲れがたまらないようにするために、しっかり休むようにしたり、疲れをほぐしたいときにはよくコーヒーに砂糖を入れて飲んだりしているという。

#### オ〈相手の先取り発話容認〉

これは、話す場面における工夫の一つではあるが、ア〈話し方のテクニック〉とは違い、なるべくどもらないように話すというより、自分がどもったときに相手にどう対応してほしいか提示するような工夫である。

##### オ-o「相手に声掛けをする」

Bさんの工夫。この工夫は、Bさんが工夫として語ってくださったことではなく、我々が工夫の一つだと考えたことである。インタビューが始まってすぐに、Bさんが「言い替え」という言葉を話す時にどもって少し時間がかかることがあったが、その時に、我々に「言葉が出てきにくいときとかなんか次これ言いたいのかなって大体わかったら言って下さると [ありがたい]」と声をかけられた。それまで、助け船を出すという気遣いができていなかったことを反省し、こちらが謝ると、「いや、謝らなくていいですよ、それは結構人によって言う人と言わない人がいるから」とのことだった。

#### カ〈文字で伝達〉

このカテゴリーに分類されている工夫は一つ一つは異なる側面をもった工夫であるのだが、話すことではなく文字で伝達するという点が共通しており、このカテゴリーを設定した。

##### カ-p「記述し発話を避ける」

Bさんの工夫。英語の授業で、自分が英文を日本語訳したものを、ほかの学生も聞いている状況で読む機会があるそうだが、その時に吃音が出ることが多いので、ノートにあらか

じめ日本語訳を書いておき、それを教員に読んでもらうという「工夫」を行っている。また、別の英語の授業でも同じようにすると、授業後にあらかじめ日本語訳を書いたノートを見せることで、授業中に読んだのと同じ点数をもらえることになったという。その授業では、予習として日本語訳を行うのだが、Bさんが現在行っているように日本語訳をそのままノートに書いてくる人もいれば、わからない単語を調べたりしたことを英文に自分がわかるようにだけメモをして、授業中に当てられたらそのメモを見ながら日本語の文章にしていく人もいるようだ。

Bさんはこの「工夫」を大学に入ってからすぐに行ったわけではなく、2016年に入ってからこの工夫を行っている。それまでは、ノートに日本語訳をすべて書くことはしておらず、授業中に当てられたら他の学生と同じように日本語訳を口頭で発表していた。しかし、「それをするのもなんか結構しんどいなと思って。これまで多少無理してたので、まあいっか」と思ったと述べている。また、そう思ったきっかけとして、Bさんは1年間大学を休学しており、「時間が経ってそんなみんなと同じように頑張らなくてもいいやみたいな考えになってきたってことだと思います」と、この「工夫」を始めたきっかけを説明している。

カ-q 「筆談」

Bさんの工夫。外国人とコミュニケーションをとるときや、窓口で切符を買うときなどによく行っている工夫である。Bさんは日本語を話す時よりも、外国語を話す時のほうが吃音の症状が出現しやすいということで、外国人とかかわるときは、ノートに伝えたいことを書きながらコミュニケーションをとっている。また、新幹線の切符を買うときなど、「本日A駅からB駅まで自由席の切符を購入したい」とノートに書きそれを見せて購入している。

Bさんは、「とりあえず書いとくだけでも安心なんですよ。あのつまり言えなかったときは見せたらいいじゃないですか。だからとりあえずまあ口で試しにまず言ってみて、結構書いてたら安心できるから言えるんですよ。」と言う。どうして「安心できる」といえるのかというと、「音だけ声だけで伝えないといけないっていうのは結構プレッシャーですけど、まあなんか書くっていう選択肢もあるって思えてたら心理的に楽」だからだという。そして、筆談について、「なかなか言葉が出にくいときとか書いたら、向こうも、話してる相手も意味がわかるから、それでちょっと気が楽になってその言葉が言えたりもするし、だからやっぱり筆談超大事ですね絶対ノート持ち歩いてます。」と言っている。

カ-r 「インターネット、SNS等の活用」

Bさんの工夫。あえて「工夫」として挙げるほどのものではないのかもしれないが、これらは「声に出して会話しない」「文章で記述する」コミュニケーションの一つであり、「工夫」の一つとして挙げた。どういうことか。吃音者が苦手とすることの一つに電話がある。Bさんも電話について、「僕電話とか絶対いやです。するのめっちゃ勇気いりますよ。1日1本が限界です。1日1本絶対かけないな、週に2本くらいが限界ですよ。」と言う。このような電話に関する状況があるため、メールなどの文章でのやり取りは電話に代わる連絡手段となり、BさんもメールやSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）の存在は大きいと言う。

Bさんは、竹内敏晴（演出家、身体論の実践者）の弟子の人によるレッスンをA市内で企画して行うにあたって、開催場所としてある神社を考えていた。弟子の方とはSNSで連絡をとっていたが、費用などについて確認するため神社に連絡しようとしたときに、連絡手段としては電話番号しか書いてなかったため、授業を1つ休んで実際にその神社に行って話を聞いたという（結局費用が高かったため、その神社でのレッスンはなしになった）。Bさんは「電話があったら値段聞いてそれで終わりだからいちいち授業さぼらなくても。これ仕方ないですよ。」と言っていたが、「インターネット、SNS」以外に「現地への直接訪問」も含めた方が良いかもしれない。

キ〈サブカルチャー〉

社会学事典によると、サブカルチャーとは、「ある集団に特有の価値基準によって形成された文化で、その社会の支配的文化の中に飛び地のように存在するものを指す」（高田昭彦，1988:337）という。また、下位集団とは、「一つの集団の内部に分化してできた集団を、前者のより包括的な集団との関係で下位集団という」（著者不明，1988:120）とされている。吃音者を一つの集団としたときに、その中でも採用している工夫がそれぞれ違っている複数のサブカルチャーや下位集団があるように思われ、その多様性の状況もひとつの「工夫」であるように思われた。

たとえば、Bさんは、以下のq「からだに注目する」という工夫と、「新たな話し方を身に付ける」という工夫を対比させて、「新たな話し方を身に付ける」という工夫は採用せず、「からだに注目する」という工夫を採用している、と語ってくださった。このように、選択的に「工夫」を選ぶことが、「工夫」を、たんなる生物・物理学的なものから、社会的なものにすることに繋がっているように思われた。

<sup>2</sup>じつは、この工夫「f」に関するAさんインタビューからは、さらに興味深い「工夫」に関する秩序が見いだされている。すなわち「工夫の実践に関する場面選択性と場面別の序列性」が発見されたといえるのである。Aさんは、日常場面では「f」を用いないようにしているが、他の工夫を行っても、吃音の発現を抑止できない場合には、日常生活場面でも「f」を使うのだという。ここからわかることは、各「工夫」間に、「工夫の試行順序に関する序列性」がある、ということであり、さらにその「序列」は、場面ごとに違った構造を持っている、ということである。今回の我々の調査は、3人という少人数が対象であったため、この「選択性」と「序列性」に関する「吃音者の生活構造」を総合的に明らかにするところまでは至らなかったが、今後の研究課題ではあるといえよう。

<sup>3</sup>言いつらい（どもりやすい、一音目が出づらい）言葉を同じような意味の言葉に言い替えて話すという工夫。例：「歩いて行く」→「徒歩で行く」

<sup>4</sup>ただし、r「インターネット、SNS等の活用」は、連絡手段として健常者も日常的に行うことであり、周囲の人に吃音者、障害者だということが明らかになる可能性は低いと考えられる。

<sup>5</sup>インタビュー記録中および引用文中の〔 〕内は、引用者による補充・注記である。以下に同じ。

<sup>6</sup>この部分、カテゴリー分けを丁寧に行うと、Bさんが行っている行為は、以下の4つの行為カテゴリーのうち、①&②、②単独、③単独、または④単独、のいずれかである、ということになる。すなわち、①「購入メモの事前作成」、②情報の送受信回路の制限的実行、③発声障害者の偽装、④聴覚障害者の偽装、の4つであるが、この4つで考えた場合、④聴覚障害者の偽装、と決めつけることには慎重でなければならないだろう。

なお、本文では、事前の「購入メモ」の作成を特記すべきことがらとして扱ったが、切符の購入に関して「購入メモ」を事前に用意することだけなら、健常者も行うことがある。また、購入前にインターネット上のサービス（『Yahoo 路線情報』等）を利用して、旅程を印字してから購入に向かう場合、「購入メモ」の作成にかかる手間は、かなり小さいと思われる。つまり、この事例の面白さは、Bさんが「購入メモ」を作成していることではなく、Bさんが「筆談」という“コミュニケーション類型”を自覚的に選択していることなのである。残念ながら、今回は、チケット購入場面の参与観察までは行えていないので、どのような「振り」や「偽装」をBさんが行っているのかは判然としないが、「筆談」というカテゴリーを自主的にBさんが選択していることから、少なくとも①だけではない、コミュニケーションの類型を実施している、ということではできよう。

なお、②単独（窓口担当者側が音声メディアを利用することは容認するが、購入者側からは、音声メディアでの発信をしないことで、コミュニケーションをスムーズにするため

---

のやり方) というのは、通常は「筆談」という“コミュニケーション類型”に属さない行為であると思われるが、今回は、窓口担当者側が音声メディアを使わなかったかどうか、については、十分な情報収集ができなかったので、念のため、分類可能性として入れてある。この4つのどれが実施されているのかは、類型分けにおいて重要なので、続けての研究が必要であろう。

<sup>7</sup> ここでは、ベネフィットーコスト＝総利益、と考えている。

<sup>8</sup> 「※#1」は「※」さんの「#1」を表すものとする。したがって「E#1」は「Bさんの#1」となる。

<sup>9</sup> Aさんの発話中に出てくる「発達障害としての吃音」という議論については、インターネット上に公開されている(日詰正文, 2015)を参照せよ。これは、NPO 法人全国言友会連絡協議会が、厚生労働省の技官を招いて、2015年6月に開いた講演会を、文字起こししたものである。従来、日本国内では、「吃音」は、身体障害の一部として支援を受ける流れが存在したが、近年、米国精神医学会が2013年に発行したDSM-5(『精神障害の診断と統計マニュアル』第5版)中で、「吃音」を「神経発達障害(Neurodevelopmental Disorders)」という大カテゴリー(「広義の発達障害」と理解してよい)に組み込んだことから、「精神障害」としての支援を受けることも可能となった。つまり、現在、吃音症は、しっかりとした診断書さえ取れば、精神障害者保健福祉手帳の取得を通じて、行政の福祉サービスを利用できる形になっている。

<sup>10</sup> ここでの「カテゴリー対」と「カテゴリーに結びついた活動」に関する議論は、エスノメソドロジーにおいて展開されているものを参照した。

<sup>11</sup> 吃音者の「工夫」に関する健康科学的研究としては、(宮本・都築, 2012)ほかを参照した。また、本稿の全体は、渡辺克典が(渡辺, 2015)(渡辺, 印刷準備中)ほかによって切り拓きつつある「吃音の社会学」の領域の議論の一部たらんとして構想されたものである。

## 〔文献〕

- 秋風千恵, 2013, 『軽度障害の社会学——「異化&統合」をめざして』ハーベスト社.
- 日詰正文, 2015, 「吃音と発達障害者支援法」, (NPO 法人全国言友会連絡協議会 2015 年 6 月講演会の記録, 東京都障害者福祉会館 集会室, [https://sys.amsstudio.jp/region/baggage\\_leo/tokyo/0000004957/doc/00010.pdf](https://sys.amsstudio.jp/region/baggage_leo/tokyo/0000004957/doc/00010.pdf))
- 見田宗介・栗原彬・田中義久編, 1988, 『社会学事典』, 弘文堂.
- 宮本昌子・都築澄夫, 2012, 「発話への注目・工夫について——吃音治癒の基準の検討」『目白大学 健康科学研究』5:1-9.
- 高田昭彦, 1988, 「サブカルチャー」, 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』, 弘文堂:337.
- 著者不明, 1988, 「下位集団」, 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』, 弘文堂: 120-121.
- 渡辺克典, 2015, 「あいまいな吃音の諸相」『生存学』8: 150-160.
- 渡辺克典, 印刷準備中, 「吃音者宣言」とその後: 当事者と専門職、あるいは病・障害をめぐって」『<当事者宣言>の社会学』東信堂:頁未定.

\*\*\*\*\*

【編集後記】

『現象と秩序』第6号をお届けします。巻頭の村中論文は、関西方言に関する研究です。本誌は、『執筆要領』にもあるとおり、人文科学・社会科学の多くの領域の議論に開かれています。また、抜刷代わりに著者の方にはPDF版の配布をおこなっており、そのコピー及び再配布は自由となっております。ふるってご執筆ください。2番目の樫田論文は、『保健医療社会学論集』27巻2号に掲載された「論文投稿支援ワークショップ」実施報告の4論文に関しての、コメントをまとめたものです。『保健医療社会学論集』の当該号は、2018年9月まではWEB公開されませんが（公開までの期間の短縮を検討中）、全国の多くの大学図書館には所蔵されています。本論文と一緒に見て頂けるとより活用しやすくなると思われます。3番目の山田・樫田論文は、吃音に関しての社会学的研究です。病因論や治療論とは別の社会学的研究が吃音に関して可能であることを証明しようとした論文です。「表1」だけでも見て、興味をもった「吃音者の工夫」に関して、その該当箇所を読んで頂けると幸いです。吃音はコミュニケーションの障害なので、その症状も、症状に対処するための工夫も、いずれも社会（学）的現象なのです。新領域開拓的研究は、本誌の得意とするところです。ご堪能下さい。最後の山崎・樫田論文も、新領域開拓的研究として載せています。日本語の文法や語彙が完全ではないインタビューイヤーであったとしても、使える資源を総動員して、意味の会話的達成を行おうとしています。その努力に応える社会学をなんとか構想し、実践したいと考えて書きました。

次号には、「学園都市的食文化を考える」という特集（仮題）が組まれる予定になっています。また、単発の論文としては、家族内会話をめぐる分析、車イスバスケットボール研究、ALS在宅療養研究等が載る予定です。ご期待ください。（Y.K.）

\*\*\*\*\*

『現象と秩序』編集委員会（2017年度）

編集委員：樫田美雄（神戸市看護大学）、中塚朋子（就実大学）、堀田裕子（愛知学泉大学）

編集幹事：坂根杏奈（神戸市外国語大学）、平田菜津子（神戸市外国語大学）

編集協力・印刷協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第6号（第2版）

※改訂箇所：第1論文の表7と表9が頁をまたがっていたため行送りを修正した。

2017年 3月31日発行→2017年11月14日第2版発行（WEB版のみ、11～13頁のみ改訂）

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 樫田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074（樫田研）,e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>